

來子日
去子日

Essai

檀
一
雄

檀一雄

来る日 去る日



来る日 去る日 著者 檀一雄^{だんかずお}

昭和四十七年五月十日発行

昭和四十七年七月二十日第二刷 発行者 関口弥重吉

発行所 皆美社 東京都千代田区九段北三ノ二ノ一一

電話 東京二六四・三九〇五 振替東京一四八〇二二

印刷 中央精版印刷 製本 関山製本 定価 八八〇円

I

詩人と死	9
一人で金槌をもってする	18
だれのために書くか	30
わたしは発言する	34
私は文壇をこう見る	40
作家精神のありよう	49
白日の嗚咽	51
文飾の咎	54
我が証言	56
現代さま	59
わたしの洗脳	64
わが顛落	75

世界	78
文士十年説	84
「ポリタイア」発刊覚書	88
教育について	92
日本人と信仰	94
無限の自由と悲しみを手に	96
旅の行衛	98
日本の日	101
不思議なデビュー	103
「リツ子・その愛その死」の静子	106
II	
佐藤春夫の憂鬱	109
顔・佐藤春夫	116

さかんなる詩魂	118
わが師佐藤春夫	120
教訓―火野葦平―	128
亀井勝一郎氏の美的情緒	130
木山氏をいたむ	132
音問―梅崎春生―	134
保田與重郎と五味康祐	138
尾崎一雄と私	144
三島由紀夫	148
酔顔に天地を映して―草野心平氏の酒―	151
滝沢修氏の荒行	152
サムとアントニオ	154
棟方志功の世界	158
文芸の完遂―太宰治―	165

坂口安吾・「白痴」について	169
フォークナー寸感	172

III

じじばばの花	177
コウモリ（風）とホンゲンギョ（焚火）	185
“沖の端”の声	188
白秋の庭	191
少年の日のけだるい孤独	195
ザボンの家	197
夢去りぬ	199
「この人を見よ」	206
座右の書「ベートーヴェンの生涯」	208
敗戦の唄	215

息子と共に 226

わが半生の元日 228

悠悠たるかな 233

わたしの散歩道 235

久留米絢 236

私が産む草木虫魚 238

住み、そして去る鳥と獣 240

IV

天の賜暇 247

来る日去る日 249

I

詩人と死

一

蚊屋を吊り、そのなかに机を入れて、原稿用紙をいかにも大切な仕事半ばのように散らばしている。実は夜昼を問わぬ己の懶惰をむさぼりたい貧しい心の性からである。うつらうつらと机の側らで眠ってばかりいる。

蛙が鳴いている。時々子供が眼をさます。母を失うた子供を抱えて、やもめの父が縁から闇の中に子供の小便をさせる。燃え残りの螢が一匹ゆっくりと左に流れる。

あれは何処だ。岳州の辺りだったかな。十月というのにおそろしく大きい支那螢が叢の中に燃えていた。不気味な叢の中にだ。不馴れな土地の闇の中にだ。そういえば雲溪という駅だったかな、駅をすべり出た列車が、小雨の中をすぐ又後戻りをした。地雷が敷設されているというのである。

爆死。ああいう思いがけぬ陥穽の中に否応なしに自分の生命がたたき込まれるというような光榮は、今後もうちょっと見込がなくなったわけだ。有難い太平の御代である。

蛙が鳴いている。涼しいのが何よりのことだ。三時半である。蚊屋の丁度電燈の真下に虫が一匹とまって

いる。そのシルエットが拡げられた原稿用紙の上に大寫しになっている。ガチャガチャか、松虫か、鈴虫か、何か知らぬ。半透明の稀薄な影になって、動く度に足の文様が沢山に揺れる。

シルエット、ロッテの影絵、シュタイン夫人の影絵、莫迦莫迦しい話である。女房の影絵が俺の心の果の方に虫の影絵の文様のように稀薄に揺れる。

一昨年の今夜が抜けでるように明るい月夜だったということを刻明に覚えているのに、今夜は闇の夜である。闇の夜に潮のような蛙の声だ。

あれは白螺磯の土民の家の二階だった。死んだ別府少佐達が漢口に集結していたので、白螺磯の空勤宿舍は、風来坊の私一人だった。アンペラの上に眠っていた。いや、丁度今晚のように、半分覚め、半分眠っていたのである。珍らしく敵機が来ない。陣中蚊屋の表裏に月光が白く流れている。ぼんやりと家郷のことを考えていたろう。

蛙の声がはじまった。よく聞いていると、一匹の蛙が指揮を取っているのである。

くるっ　くるっ

とそいつが云う。氣取った声だ。すると、

があがあ

と合唱が続く。

くる　くる　くるーっ

と又指揮の蛙が声をしぼる。

があがあ　があがあ

と一斉に合唱の雨である。それが実に一糸乱れぬ統率された合奏になっていたのを不思議に思った。夜明

け迄、不思議な合唱はつづいていた。何処の蛙もそうなのだろうか。丁度二年の間戦乱に追われてついぞ確かめて見なかった。

が、郷里の蛙は、ただ潮のようにざわざわと啼いているばかりのようである。それとも、一集団毎の蛙は指揮者に統率されているのかも知れないが、こう沢山田があつては各合唱がもつれ合つて、潮の声のようにきこえるのだろう。

涼しい。虫のシルエットは相変わらず原稿用紙の上に輪廓のぼけた屈伸の文様を描いている。女房が迷うて虫になつて来たのかも知れない。よろしい、今夜は俺の蚊屋の中に入つて、太郎の体に添うがよい。俺は又浮世の文章を綴らねばならぬ。

二

さて一体、何を書く心算なのだろう。「詩人と死」などつまらぬ煽情的な題名を真鍋君に云つて終つた。もう目次を組んで、おろして終つたというのだから、題名は不動である。

もともと、何も詩人の死について語つて見ようと思つたわけでも、或は又詩人と死の因果關係について叙べて見ようというのでもない。

二年ばかり筆を絶つて終うと、考えることが妙に氣遅れする。思うことが流露しない。

「中原や津村や立原、矢山などと詩人の思い出でも書いて見ましよう」「書く、書く」と確約しながら、真鍋君を余りだますのも、自分をあざむくようで残念である。

但し死んだ友人の思い出など、書いてみたい氣持はない。

意味のない表題を掲げて、己のかたくなな心緒を紡ごうというさもしい魂胆からだ。断っておくが、どうせ人様に納得のゆく解題には終らない。

さて詩人は死んだ。莫迦莫迦しいことだが、詩は残っている。体験と錯誤と、肉感と憤怒と、湿度と風速のなかに偶々一つの我流の情緒が定着された、だまされる。形象されたと自惚れる。この秘かな愉悅の為に、詩人という途方もない人間の営みがくりかえされてきた。今後も性こりなく繰りかえされるにちがいない。

さて詩を残そうと思って書いた奴はいないだろう。けれども莫迦莫迦しいことに詩は残っている。音律の中に巧まれた作者の肉感が、時に読者の肉感をくすぐるのである。色々の男や女が様々の感傷の中で読むだろう。作者と近似の愉悅を味わったと自惚れる。それでよい。うまくゆけばお手拍子喝采である。間違ってもよい。死んだ奴の詩なんぞは、せいぜい冒瀆するに限るのである。

今更これらの詩の生産に費やされた莫大な原価計算をしてみてもはじまるまい。有能な企業家ならこれほど愚劣な生産の行程があり得ることを信じまい。驚くより想像の外である。

それでよい。揃いも揃った大馬鹿者どもの徒勞の痴夢である。さてその企業家の奥さんも又詩を読むだろう。読んで何応の反応を示すだろう。時に御主人との会話に我々の詩人達の名前が召喚されるかも知れない。目出度い風景としてだ。それでよい。

だから詩人の思い出など語らぬに越したことはない。思い出す側がカロッサほどの詩人ならば、すべての溪流に膝まずいて、豊穣に汲み取り、やがて取捨してゆくだろう。

我國の今日に於ては一人の詩人が一人の詩人にひそかな影響を与えることすら困難である。暗い盲亀が波に浮んで翻弄され翻弄されるだけのことである。一緒に押流される。あやめも知れぬのである。

三島由紀夫君。林富士馬君。真鍋呉夫君。この国では一人の美しい男が、一人の美しい女を当然のように呼びなつかしむことすらむずかしいのである。

君等の仕事は、だから一人の詩人が一人の詩人に、息吹のように甘い切ない耳語を語り伝え得るような環境を作りたまえ。承け、承け渡してゆく生粋の詩人の系譜を作りたまえ。やがて五十年後の君等の議場演説に、壮大な文明が語られ、同時にその文明がささえられている小さな数限りのない星と藁の詩人達の交友が編みこまれることを切望しよう。

私の世代では死者を冒瀆する以外に彼等を顕彰する表現の方法がないのである。

夏草や つはものどもが夢の跡
とここに長大息しておこう。

三

私は生来人の死に目に会うことが少かった。少くも一昨年支那に旅立つ迄、死人の姿を見たことは皆無である。

近親者の不幸が少かったせいもあるが、生れつき怯懦な私が人の死に会うことを心の底で極力避けていたのかも知れない。いや実際注意深く避けてきた。私は少年の日から、溺死や轢死を聞けば、いつも能う限りの遠路を迂回した。

父方の祖父は七年前に死んだが、これは満洲に旅行中のことで、電報を受け取っても、何となく愚図ついで、旧家にたどりついたのは式後十日過ぎのことである。祖母は在支中に死んでいた。祖父が九十歳で死

に、祖母が八十六歳で死んでいるから、私にとっては死というものは心と目の衰耗の果に、丁度たそがれのように静かにすべりよるといふあいまいな自覚しか持合せなかった。

もっとも母方の祖母が納屋の中でくびれて死んでいるが、これは私が母や祖母と十五年も別れていた目の出来事で、後日母との再会の日に聞かされ、祖母の性情を静かに回顧しながら、その死を私の心の中でゆっくりと重ねて見たばかりであった。

このような死に対する自覚の薄弱というものは、結局死に対する誘惑と危険から自分を救うもののようにある。私も青年の日に、かりそめの焦慮から、時に思いがけぬ不吉な妄想を描いたこともあったが、死の現実的な感覚を知らぬものにとつて、死というものは結局童話風の幻想に終るのがならわしのようだった。もっともこの救済は私の現世享樂的な根本の性情によっているのかも知れない。

さて三十三年の間用心深く死者の表情を見ることが避けてきた私が、これはまたこの二年の間におそらく数百を越える死の諸相を目のあたりした。

その皮切りは漢口市の街角である。一昨年八月の半頃のことだったろう。暑い日だった。往還の舗装のタールがとろけていた。

麻袋を積んだ馬車が進んでいる。その馬車の後ろを乞食のような少年達が手に手に袋を下げて追っている。わめく。馬車の麻袋に小刀か何かがつきさされた。純白の粉末がこぼれはじめる。少年達はその粉末を袋に掬いながら馬車を追う。

四辻の巡捕が呼びとめた。はげしく罵る。一散に少年達が散る。一人の浅黒い少年ばかり立止り振返って口喧しく答えている。巡捕が少年を捕える。その手の中を少年はすると逃げて、ふりかえって又わめく。その指先と口と齒が、何か白昼の狼火のように感じられた。